

APSEC'97に参加して

中谷 多哉子¹ 大西 淳²

概要

第4回アジア・太平洋ソフトウェア工学国際会議(APSEC'97)は1997年12月2日から12月5日に渡って香港において開催された。本稿では会議の概略と印象について述べる。

A Brief Report of the 4th Asia Pacific Software Engineering Conference (APSEC'97)

TAKAKO NAKATANI¹ and ATSUSHI OHNISHI²

Abstract

The 4th Asia Pacific Software Engineering Conference (APSEC'97) has been held in Hong Kong, China, from December 2nd through 5th, 1997. In this article, we will briefly summarize this conference.

¹Sラagoon

SLagoon

²立命館大学大学院 理工学研究科 情報システム学専攻
Department of Computer Science, Ritsumeikan University

1. はじめに

第4回アジア・太平洋ソフトウェア工学国際会議 (Asia Pacific Software Engineering Conference, 略称 APSEC) は1997年12月2日から12月5日に渡って中国に変換されたばかりの香港において開催された。APSEC は毎年12月に開催されており、初回は94年に東京で、第2回は95年に Australia の Brisbane で、第3回は96年に韓国 Seoul で開催されてきた。APSEC は情報処理学会のソフトウェア工学研究会と韓国 Korean Information and Science Society の SIGSE によって組織された Joint Conference on Software Engineering (JCSE) を発展させたものであり、日本、韓国の他にオーストラリア、香港、台湾、シンガポールが幹事国・地域となっている。参加者はこれらの国・地域に限定されることなく、アジア・太平洋地区はもちろん、北米やヨーロッパからも参加者が多くある。実際、投稿された論文の1/3は北米・ヨーロッパからのものである。

今回の APSEC では3件の基調講演、4つの tutorial, poster セッション、51件の論文発表があった。投稿論文数は107編で、12編がオーストラリア、37編が北米・ヨーロッパ、51編がアジア・太平洋地区からであった。参加者の国別内訳は図1のとおり。参加者は87名で、主な参加者は、日本、韓国、オーストラリアからそれぞれ23名、14名、13名であった。続いて台湾から7名、主催国の香港からの参加者はわずか5名であった。アジアの経済事情の影響を受けてか、香港の参加者が少なかったのは残念である。

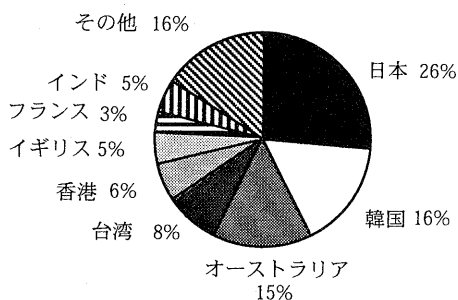


図1 参加者の国別内訳

Fig. 1 Participants Breakdown

今回の APSEC の特徴は1) IEEE Hong Kong Section Computer Chapter が主催する International Computer Science Conference (ICSC'97) との共催の形を取ったこと、2) regular paper の他に concise

paper を設けたことがあげられる。ICSC との共催となったためか、「ソフトウェア工学」から「ソフトウェア一般」へとテーマが広がった印象を受けた。また concise paper は poster が貼り出されたが、特に発表の機会はなく、もう少し工夫があれば良かったと感じた。

2. チュートリアル

本会議が開催される前日、以下の4つのチュートリアルが開催された。

- Organizing, Managing and Optimizing Software Testing
Hans Schaefer
- Design Patterns Essentials, Experience, Java Case Study
Walfgang Pree, Hermann Sikora
- OPEN-MeNtOR: A Third Generation OO Methodology Advanced Tasks and Techniques
Paul A. Swatman
- Design and Implementation of Coordination and Workflow Management Technology
Frank von Martial

何れも半日のチュートリアルであったが、各チュートリアルとも10人規模の会議室で開催され、参加者の少なさに驚かされた。我々が参加したチュートリアルは「OPEN-MeNtOR」であったが、参加者はアシスタントと思われる人物を含めて7名であった。

3. 基調講演・パネル

3日間の本会議中、以下の基調講演とパネル討論が行われた。

- 基調講演1: Observations Regarding Internet and Intranet Technology
Bruce Shriver, Genesis 2, Inc. and University of Tromso, Tromso, Norway
- 基調講演2: Who will build the digital systems?
Les Belady, Mitsubishi Electric Corporation
- 基調講演3: Software Industry in Mainland China — Opportunities and Problems
Xiling Zhou, Beijing Information Technology Institute
- パネル1: Exploring the niche market: the future of software professionals in the Asia-Pacific region

Panel Chair: Vincent Shen(HKUST, Hong Kong)

Panelists: Anthony Au(ABC Data & Telecom Ltd., Hong Kong), Les Belady (Mitsubishi Electric Corp., USA), Federick Yung(Hong Kong Industrial Technology Centre Corp., Hong Kong)

● パネル 2 : The Year 2000 Problem

Panel Chair: Kouichi Kishida (SRA, Japan)

● パネル 3 : How can Software Engineering Techniques Help Small Developers?

Panel Chair: Hareton Leung (Hong Kong Polytechnic Univ., Hong Kong)

Panelists: Soo Dong Kim (Soongsil University, Korea), Kouichi Kishida (SRA, Japan), John Goh (Hong Kong Jockey Club, Hong Kong), Daniel Wong (Motorola, Hong Kong)

各パネル、基調講演とも盛況であった。パネル1は、マイクロソフトや大手ソフトウェア会社に対抗できないソフトウェア屋は、どのようなニッチ戦略を展開すれば利益を得ることができるか、地域限定市場で満足してよいのかといった、商業都市、香港事業家による迫力ある議論を聞くことができた。パネル2では、日本においては頭の痛い問題として取り上げられている2000年問題が、インドでは大きなビジネスチャンスとして捉えられているなど、アジア各国における2000年対応について議論された。パネル3では、ソフトウェア工学という技術がいかにして技術者を救うのか、といった議論から、企業の「なすべきこと」と、「何かから手をつけるべきか」といった議論に発展した。このパネル3は、パネリストが欠席するなど波瀾含みで始まったが、会場との議論は活発であった。

基調講演を行った Les Belady 氏は、日本との関わりも深く、ソフトウェア技術者協会主催のソフトウェアシンポジウム'98での講演も予定されている。ソフトウェアシンポジウム'98の詳細な日程、基調講演に関する情報は、

<http://www.media.osaka-cu.ac.jp/SS98/>
を参照されたい。

4. セッション

APSEC'97の主な論文の募集範囲は、要求工学、ソフトウェア分析/設計、再利用、並列/分散システム、ソフトウェアアーキテクチャ、CASE、リアルタイムシステム、オブジェクト指向システム、形式的手法、ド

メインモデリングと分析、設計パターン、ソフトウェア信頼性とテスト可能性、ソフトウェア開発環境、保守、リエンジニアリング、情報システム開発と管理、ソフトウェアメトリクス、リバースエンジニアリング、ソフトウェアプロセス、品質監査、協調型システム、電子図書館、教育、モバイルシステム開発、ソフトウェアプロジェクト管理であった。募集論文の項目を見るとおり、ソフトウェア工学全般を越えた分野を網羅して、広く募集された。インターネット時代を反映してか、モバイルシステムに関する研究論文の募集もあった。

セッションは3セッション並列で行われた。各セッションの構成は以下のとおりである。

- 1日目 Session 1-A: Metrics & Quality Assurance
 Session 1-B: Formal Methods
 Session 1-C: Knowledge and Logic Based Systems
 Session 2-A: Object-Oriented Techniques
 Session 2-B: Validation and Verification (I)
 Session 2-C: Distributed and Mobile Systems
- 2日目 Session 3-A: Software Design Methodology (I)
 Session 3-B: Validation and Verification (II)
 Session 3-C: Software Process
 Session 4-A: Software Design Methodology (II)
 Session 4-B: User Interaction and Software Process Improvement
 Session 4-C: Testing
- 3日目 Session 5-A: Software Development Environment
 Session 5-B: Concurrency

3つの会場は同一フロアであったため、会場間の移動に手間取るという前回の問題は解消されていた。ただし、3会場のうち、A会場は大きく、パネルや基調講演の開催場所として使用できる程度の広さがあったが、C会場はA会場の半分程度の広さがあったにもかかわらず、20名程度の席しか用意されていなかった。B会場はC会場よりも狭かったが、50席程度用意され、筆者が参加した4-Bのセッションでは、7割り程度の席が埋まる参加者があった。各セッション会場は、A,B,C

の順で、香港の主権者側の予想参加人数の多さを語っているが、実際の参加者もその予想に反しなかったようである。セッション番号とタイトルを参照することによって、アジア太平洋地区におけるソフトウェア工学の時流を判断できるのではないだろうか。

各セッションの内容については、論文集から情報を得てほしい。

5. 雑感

会議の内容以外での雑感を述べる。

- (1) 会場のホテルが未完成だった。
日本ではちょっと考えられないが、会場となったホテルはオープンして間もなく、開催期間中も工事中で一部が機能している段階だった。会議中にも時にはドリルの音が響いたりドアを開けると未完成の部屋だったりした。隣接するショッピングモールから会場への案内板は出来ているのだが、通路が未完で最初たどり着くのに苦労してしまった。
- (2) 参加者が少なかった。
経済不況に揺れるアジアでの開催であったことからか、本会議でもチュートリアルでも参加者が極端に少なかった。あるセッションでは参加者は10名を割っており、あるチュートリアルでは7名しかいなかった。そもそも地元の香港から主催スタッフを除いた参加者は2名しかなく、国別参加者で一番多かったのは日本だった。
- (3) お昼がいつも同じメニューだった。
ホテルのレストランでの Buffet 形式だったが、何故かメニューは毎日殆んど変化しなかった。
- (4) Banquet の時間進行がまずかった。
Banquet では主賓の到着を待って開始予定時刻から1時間余りの間、酒も料理もお預けだった。
- (5) Banquet のカラオケで盛り上がった。
テーブル別でカラオケ大会が始まったが、大いに盛り上がった。カラオケのマイクのおしつけ方は万国共通だったのに驚いた。
- (6) 香港事情 1：物価は高かった。
香港といえばブランド品が安い、というイメージが強いが、香港が中国に返還されて以来、1香港ドルのレートが17円から20円に保たれており、日本でのブランド品の値下げ現象を鑑みると、決して安いという感じはしなかった。
- (7) 香港事情 2：5種交換可能型小型レーザポインタは人気だった。
会議が開催されたホテルから歩いて5分程のと

ころに、安売りの露天が並ぶ女人街があった。ここの露天は、夕方から深夜にかけて盛況となるため、会議終了後の時間は多くの参加者が女人街を散歩した。日本人参加者に人気だった商品は、小型でポインタの形状が5種類に交換可能なレーザポインタであった。香港にプレゼンテーションをする人間がそれほど多くいるとは思えないが、この商品を販売している店は少なくなかった。

6. おわりに

APSEC'97に参加して、会議内容と大雑把な印象について紹介した。APSEC'97 & ICSC'97のより詳細な情報は

<http://www.comp.hkbu.edu.hk/apsec>

で入手可能である。次回の APSEC は 98 年 12 月 1 日から 4 日の予定で中華民国台湾省台北市において開催される。論文締切は残念ながら 5 月 30 日でこの研究会開催時点では締め切り間近となっている。(が過去には1カ月ほど論文締切が延期されたこともあった。)

Web Page は

<http://www.selab.org.tw/apsec98>

である。また次々回の APSEC は元々はシンガポールが開催国であったが、事情により日本が再び開催国となる予定である。皆様の積極的な投稿・参加を期待したい。